

私が学生時代にアルバイトをしていた「ピントールの家」のメニューには、ステーキがあった。めったに注文が入ることはないのだが、いざ入ってしまうと大変である。すぐに近くのお肉屋さんで電話となる。そして、バイトの私がお肉を買いに行くことになる。

この肉屋さんが、一時期欽ちゃんのテレビ番組に出ていた「おっくん」の家だったのである。あの当時「おっくん」が、お店で同級会を催してくれたことがあった。私も「おっくん」とお話をしたのだが、テレビのままであった。あれは演技ではなく、普通にしゃべっていたのだとわかった。

伊集院静さんと篠ひろ子さんが住む家は、あっけなく判明してしまった。後日、有名作家と元有名女優のお宅を探してみると、すぐに見つかった。イメージ通りの大きな家であった。予想通り表札はなかったが、玄関に「I LOVE NOVO」とあったので、すぐにわかってしまったのである。NOVOとは伊集院夫妻の愛犬の名前なのである。この犬のことがよほど好きなことは、作品を読んでわかっていた。私に有力情報をもたらしてくれた大学時代の友人に謝謝（シェシェ）である。

伊集院静さんが、1月に倒れて緊急手術を受けた。幸いにも後遺症はなく、執筆活動も再開している。毎年、4月になると新しく社会人となった若者へ贈るメッセージを執筆している。今年は「ようこそ、令和の社会人」である。

新社会人おめでとう。今日、君はどんな街の、どんな職場に立っているだろうか。どこであれ、そこが君の社会人としての出発点だ。

今年の新社会人は少し得をしているぞ。「えっ！得ですか？」それは令和で初めての社会人ということだ。「なんだ。そんなことですか・・・」私も君の立場なら、そう言い「偶然でしょう」と言うかもしれない。

でもそれは違うんだ。偶然は偶然だが、“偶然は神の采配だ”神の采配とは、私たちの持つ力以上のものが私たちに与えたものだ。恋愛という出逢いもそうだし、発見という進歩もそうなんだ。

偶然をもうひとつ話しておこう。友人の話だ。「いや君、我が家では大祖父が明治の人で、祖父が大正、昭和を歩んだ。そうして私が昭和、平成を生きている。倅は平成、令和を生きる。ありがたいと思わないか。この国があり続け、私たちが生きてこられたことを・・・」友は感慨深く話した。

たしかに素晴らしい国と、人々が今日まで歩んできた。この脈々たる流れも偶然か？いや、私はそう思わない。それぞれの時代に皆懸命に生きてくれたに違いない。アジアの片隅の、この国で人々は少しでも前へと豊かに汗を流し、向かい風に立ってきた。そして何より、いつも新しい人が、新しい力を与えてくれた。昨日までとは違う日本を、国を、職場を作ろうとしたことだ。

令和初の社会人に望む。“新しい君の力と、発想”を思いっきり提供、提案してくれたまえ。そのバトンタッチが、いつの日か、まだ見ぬ新しい元号を口ずさむ日を迎えることになるんだ。人は己以外の人のために何かをすることだ。出世や名誉やお金だけのために生きてはいけないんだ。

しかし君、先輩たちは厳しいぞ。妥協もしないぞ。さあ立ち向かおう。君ならできる。だって君は令和最初の社会人じゃないか。少し疲れたら、空を見上げて、乾杯しよう。令和の社会人に乾杯。

いつもの伊集院静さんならではの励ましである。1月には、どうなることかと心配したが、これからは伊集院静さんの文章に触れるチャンスがあると思うと一安心である。